



# 佳作

## 『祖父の見た広島』

岡村 智聖

「今年で六十五年…。」

この言葉を聞いて「戦後」と結びつく人が、この日本に  
一体何人いるのだろうか。

私は、小学校三年生まで広島県三次市の祖母の家に  
住んでいた。今年の夏、祖父母の家に届く中国新聞に  
は「被爆六十五年」の文字が多く、戦争や被爆体験記事  
がとて多かった。私は、原爆ドームにも行った事があ  
るし、学校でも平和学習を受けてきたので、頭の中では  
戦争がどんなにひどいものなのかという事を理解してい  
る。しかし、どんなに学習を重ねても、写真を見る度、  
体験記事を読む度、しようげきを受ける。涙だつて出る。

だからこそ今の「平和のありがたさ」がよくわかるし、  
戦争のない世の中にしないといけないという強い思いも  
わいてくる。

四年の時、私は山口県に引越して来た。夏が近づく  
度、何となく違和感を感じる様になっていった。我が家に  
届く新聞も、学校の授業も友達の話も戦争から「遠い」  
気がしてならないのだ。ここにいると、八月六日も、八  
月九日も、八月十五日も何事もなく過ぎていく。広島で  
は、八月六日が登校日となっていたり、平和学習がさか  
んだつたので、普通に生活していてもどこからか戦争の  
話題は耳に入ってくる。広島での事を話すとよく言われ  
るのが、

「あそこは原爆が落とされた所じゃもんね。」同じ日本で、  
こんな小さな国で起きた、あれ程の出来事も「あそこは」  
と語られるのだ。広島では身近に感じられた戦争のひさ  
んさも県を越えると、これ程までに薄れてしまふのかと  
いう空しさみたいなのを覚えた。私が  
感じた違和感は戦争に対する温度差みたいなものだった

…。

祖父の家で読んだ新聞記事には他にもこんな事がのつていた。

「戦争体験者の高齢化が進んでいる。あと何年かすれば、戦争の事を知っている人、語り伝える人がいなくなるのではないか。」その記事を読んで私は、このままではいけないと思った。

私の祖父母は、戦争の時代を生きてきた人だ。しかも祖父は、十五才の時、あの日の広島にいた。原爆の生き証人なのだ。私が小学校二年生の頃の事、病院へ行こうとする祖父に祖母が、

「これ忘れとるよ。これ持つていかんと。」と言つて何か手渡していた。それは、だいたい色で「被爆者手帳」と書いてあつた。私が「おじいちゃんの保険証つて変わつとるね。」という祖母が、「おじいちゃんは、広島で原爆におうたけえねえ…あれを病院に持つて行くとしたで診てもらえるんよ。」と言つた。それを聞いて私は、「えっ!?ただなん?おじいちゃん、いいねえ」と言つた。

すると祖父は、なぜかムツとした顔になり、

「いい事なんかありやせんよ。」とつぶやく様にして出て行つた。その時の私は（おじいちゃん機嫌悪いなあ…）位にしか思わなかつた。だけど、その時の祖父の少し寂し気な横顔は今でも覚えている。

あれから私は平和学習を重ね、あの日の祖父の言動が何となく理解できる様になつた。原爆の話を知ると時々、あの日の事を思い出す。私の無神経な言葉が祖父を傷つけてしまつた…と。

私は、今まで祖父から戦争はもちろん原爆の話聞いた事は一度もなかつた。私は何となく聞いてはいけない事の様な気がしていたので私から口にする事もなかつた。

しかし、今の学校でも今年の秋、修学旅行で広島を訪れる為、事前の平和学習がさかんに行われるようになった。自分でもそれに関連した新聞記事や本を読む機会が増えると、どうしても祖父の口から話を聞きたくなつた。私達は幸いにも「戦争を知らない子供達」だ。他の

国で戦争は今も起きている事は知っているけど、自分の国で言えば戦争は“過去”の事なのだ。けれど、今もまだ、その苦しみから解き放たれない人もいる。その人達にとっては、戦争は過去の事などではない、永遠に続く“今”なのだ。私が祖父に聞く事で祖父をまた“あの日”へおしもどすという残こくな事になる様な気がして、なかなか聞き出せないでいた。そんな私の背中を押したのは母の一言だった。

母は、私に

「あんたは、知らんぷりなんてできんのよ。だって、おじいちゃんが被爆者一世、私が二世、あんたは三世なんじゃん。あのね、被爆者二世の健康診断いうのも行われとるんよ。私も受けた事あるけど、それがどういう事か分かる？原爆が人体にどれ程の影響力があるのか、まだデータを集めとるんよ。つまり、原爆は、その日、その時だけじゃなく、ずっと後になって影響が出たりする、本当に恐ろしい爆弾なんよ。広島には放射能影響研究所という所があつて、今だに研究中なんよ。私のお姉

ちゃん、あんたのおばさんは、生まれた時から背骨がゆがんでた。生まれて間もなく、大学病院の先生が『ぜひ研究したいので診せてください』と言われたそうだけど、おじいちゃんは『うちの娘は、モルモットじゃない！』というて連れて帰ったんだって。産まれながらにして障害者：それが原爆のせいではないかもしれないけど、そうでないとも言いきれんじやろ。偉い人達から見てもまだまだえたいの知れん不気味な爆弾なんよ。私は今、健康だけど、遺伝子レベルで何らかの異常が起こつていても知らんだけかもしれん。私達の家族に苦しみを与えとるもんがどんなもんなんか、あんたは知つとかんといけんよ。いや、知る権利があるんよ。」と真じめな顔で言った。

（私は、被爆者三世なんだ…）祖父が被爆者なんだから、当たり前といえど当たり前なのだが、原爆が私のすぐ後ろまでせまってくる様な感じがして少し怖くなった。自分の体に何か起きるかもしれない…起きているのかもしれないという恐怖を感じた。六十五年もたち、実際にその場にいなかつた私が、こんなにも恐いと感じるのだから

ら、あの日、あの場所にいた人達の恐怖心は、一体どれ程のものなのだろう……。私は、やっと本当の意味で祖父の気持ちに寄りそえた気がした。

「おじいちゃん、嫌な事、思い出させて悪いんだけど、私、おじいちゃんの口から、ちゃんと聞いときたいんよ。私、被爆者三世になるんじゃないよ。ちゃんと教えてくれん？ 知つときたいんよ、あの日の事、おじいちゃんに何があつたんか、何を見たんか……。」そう言った私の言葉に祖父は、しばらく黙り込んでいたが、「後で手紙書くけえ……。色んな事がいっぱいあつて、何からどう話せばいいか分からんのよ……。」

と、少し重たい口調でそう言った。しばらくして祖父から二通の手紙をもらった。その文字は、時に荒らく、時ににじんでいて、おせじにも読みやすいと言えるものはなかった。だけど、その文字の一つ一つに祖父の思いが感じられ、私の目からは涙があふれ出た。祖父の見た“あの日の広島”が私の中に流れ込んできたのだ。

祖父は昔、学校の先生になりたかつたそうだった。その為、

広島为学校へ出ていたらしい。でも戦争がひどくなって、勉強どころではなくなつてきたそうだった。空しゅうがあれは火事になる。その消火活動にもかり出されたそうだった。原爆投下の前夜にも空しゅう警報があり、祖父のいたA組の人は、当番で学校へ行つていたそうだった。六日の朝、B組の人と交代し祖父達A組の人は宿舎に帰つて皆、くたびれて寝ていたそうだった。突然“ドン!!”というものすごく大きな音がしたそうだった。

「空しゅうだあ！」

とさけびながら皆、一斉にハネ起きて、ドアへつめかけた。その瞬間、建物がくずれてきて、祖父達は下敷きとなつてしまつたという。祖父の一メートル先で友人は、大きな木の下敷きとなり、亡くなつたそうだった。祖父は、大切な友人を目の前で失つたのだ……。その後、辺りは真っ暗となり、何も見えなくなつたそうだった。二十分位して、少し明るくなつた。その明かりは、どこかで火事が起きているせいだとは思つたけれど、まさか街全体が焼けているなど、その時は思いもしなかつたそうだった。

しばらくして、

「おーい、助けに来たぞー」という声がして、学校の先生や友人が来てくれたそうだ。よく知っている者同士でも

「お前は誰だ？」

と聞かないと分からない位、皆、ほこりとケガで顔の確認ができなかったそうだ。祖父は助け出された後、

「歩ける者は、東の方へ早く逃げろ!!」と言われたそうだ。周りを見渡すと、自分が今いる場所さえ分からなくなる程、変わり果て、無残としか言いようのない街の姿が広がっていたという。祖父がいたのは、爆心地から一、八キロメートルの所で、炎がすぐ近くまでせまってきた。助け出されるのがもう少し遅かったら焼け死んでいたという事だった。

被災し、東へ東へと逃げていく人達の行列は、まさに「死の行進」だったと祖父は言う。髪は焼けて坊主頭、全身やけどで真っ赤な皮膚、服とも言えぬボロ布がまわりついているだけの人。真っ赤な皮膚が溶け、顔はく

ずれ、男か女かも分からない人。ガラスの破片が体中につき刺さったままの人。光線を浴びて、ヘルメットが頭からはずせなくなったり、軍刀が曲がって抜けなくなったり、バタバタと倒れていく人がいても行進は止まらない…。惨状を語ればきりが無い…。とあった。

「水を飲んだら死ぬぞ!!」日本兵が叫んでいたが、水を求めて元安川へ下り、水を飲む者が後をたたず、川の中もほとりも死体だらけだったそうだ。そんな風景ばかりを見ていると、自分はもう死んでいて、ここは地獄なんじゃないだろうか、祖父は思ったそうだ。

祖父の体も気が付けば、傷だらけだったので、陸軍の治療所で手当てを受けたそうだ。そこで体を洗ってもらい、包帯を巻いてもらったそうだ。包帯はたくさんあったが、薬は不足していたので、お医者さん達は、食料の油をやけどの傷口へぬっていたそうだ。それが床へ流れ、すべて転ぶ者も多かったという。

昼過ぎ、アメリカ軍の飛行機、B29が低空でゆっくりせん回していたそうだ。祖父は、アメリカ軍が「作戦大

成功!!」と言っている気がして、腹立たしさと悔しさでどうにかなりそうだったという。

その夜、広島街は赤々と燃え続け、眠る事など出来なかったそうだ。祖父は、祖父のお父さんやお母さんが心配しているだろう、早く会いたい。そればかり思っ泣いたそうだ。今と違い、男が涙を見せるのは恥とされていた時代、こらえにこらえてきた涙：それでも、声を殺して泣いたそうだ…。

祖父の手紙には、原爆投下前の事も記されていた。原爆投下の一週間前、アメリカ軍の飛行機B29が、ピラをまいていったそうだ。そこにはこう書いてあったという。「新型爆弾を投下するから出来るだけ広島町の町から離れろ！」

しかし、日本の憲兵隊が「アメリカ軍のデマだ!!」と言ったので、ほとんどの人は、そのピラの内容を信じなかったそうだ。祖父は、あの時多くの人がひなんしていれば…と、今さらながら思う事があるという。

祖父は、比治山の事を二つ記していた。一つはいい事、そしてもう一つは…。

比治山から二百メートル位の所に、広島市民の使っていた直径百メートル、高さ五十メートルのガスドームがあったそうだ。しかし、原爆が投下された時、幸いにもガスドームは空だった。ペチャンコになるだけですんだのだ。もし、これが爆発していたら、もつと被害は大きくなっていただろうと皆、思ったそうだ。この事が原爆投下後に祖父が（良かった）と思えた最初の出来事だったそうだ。

比治山高台には大砲があり、原爆投下の三日前、アメリカ機をうち落したそうだ。パイロットは、バラシユートで京橋へ落下した。その人を皆で寄ってたかって棒きり袋だたきにしたそうだ。鬼畜米英と呼ばれていた時代だから、そうするのが当たり前だった。当たり前の事をしたんだと祖父はいう…。

私は『鬼畜米英』という言葉が分からなかったの、辞書で調べた。すると『鬼畜』があつて『鬼と畜生。人

間としての感情を持っていないような人。残酷な人。人でなし」と書いてあった。私は『鬼畜米英』とさげびながら袋だたきにする人達も鬼畜に思えた。しかし、その中に祖父もいたんだと思うと胸が苦しくなった。戦争が人を鬼畜にするのだ。

祖父は、八日の朝、ふるさとの「神杉」へ帰った。広島駅は全かいだったので、広島駅から二つ目の駅まで歩いて、そこから列車に乗ったそうだ。包帯だらけの顔を見て祖父のお父さんは、一言

「生きとったか…。」

と言ったそうだ。息子は死んだものと思っていたので、それ以上は言葉にならなかつたのだ。お母さんは、うれしそうに「お腹空いとるじやろ。何もないけど、さつま芋のふかしたのがあるけえ食べんさい。」と言って、食べ物を用意してくれたそうだ。さつま芋を見ると、この日の事を思い出すという。この時の（生きて帰れたんだなあ）という思いを…。

家に帰って包帯を外すと、傷口がかのうして、うじ虫

がわいていたそうだ。気持ち悪いのもあるけど、かゆみがひどく、かきたくてたまらなかつたそうだ。しかし、かくと傷口がひどくなる。帰ってからは、その傷がいえるまで、苦しみが続いたそうだ。

近所の同級生が終戦後、帰って来た。その人は、陸軍の為に岳詰を作っていたそうだ。それを土産に持って帰ったのだが、原爆の光線を浴びた岳詰は、内側のろうが溶け出していたらしく、食べた者は、全員下痢をしたそうだ。

祖父のお母さんは

「原爆は後から色んな症状が出て、死ぬる事もあるらしい。梅干は悪いもんを外へ出してくれるけえ、梅干を毎日食べんさいね。」と言って、毎日、祖父に梅干を食べさせたそうだ。実際に梅干が放射能を体外へ排出させたのかどうかは分からないが、祖父をはじめ、それを信じて食べ続けてきた近所のおじさん達も何とか今まで生きて来られている。祖父は、色んな人に助けられ、支えられて生きてこられた。その命があつたから、今、私はこ

ここにいるのだ…。

今、私達は“平和”といえる時を過せている。世の中、楽しい事ばかりじゃないし、どうしようもない事、大変な事も、たくさんある。だけど、少なくとも今、殺人は“犯罪”だと言える世の中だ。あんなにひどい爆弾を落したアメリカ人であつても今は、普通に日本を旅行できている。昔『鬼畜米英』と言っていた人達でさえ、うその様にアメリカやイギリス旅行に行っている。

今でこそ『そこまでしなくても…』というまともな感情がわいてくるが、いざあの場にいたら、戦争という狂った世界で生きていたら、私もアメリカ兵をなぶり殺しにしたのだろうか…。考えるだけでも恐ろしいが戦争が世の中の常識を変える。私達が当たり前だと思っている事も“今だからこそ”なのだ。いつ、どんな状況で変わっていくかも分からない。私達が“平和”だと思っているこの世の中も、決して絶対ではないという事だ。だからこそ、戦争の記憶が必要なのだ。あんな事二度と起こしてはいけない。あんな狂った世界を、人間を、二度とつ

くってはならない。“あんな”と言える記憶が絶対必要なのだ。

戦争が嫌いだと言える当たり前の世の中、平和を守りたいという強い願い、それらを訴え続ける事により“今”という時がやつと存在できているのだと私は思う。

戦争の記憶：原爆の体験を語るとは、どういう心境だろう。当然あの日を出すことから始まるのだが、あの日のさん状を思い出して、心はこわれないだろうか。夢に出てこないのだろうか。最近では、ひどい事件に出会った人はPTSDという心の病に悩むというのを聞いた事がある。そうした状態になった人達のフォローは今でこそ言われる事だが、当然、戦争の時には、そんなもの存在しない。

私は、原爆投下後の写真を見た事がある。しかし、ひさんすぎて直視できないものがたくさんあった。思い出すのも嫌な写真だつてある。それは実際に自分の目で見ただけでもないのに…：単なる写真でもそんなのに…：思い出して語るとするのは相当、心が強くないとできない

い事だと私は思う。

私は、祖父が感じたであろう様々な感情を考えると、胸がいつぱいになった。祖父は、何十年も閉ざし続けたいまわしい、忘れたであろう世界を、私の為に開いてくれたのだ。私は、祖父に

「おじいちゃん、ごめんね、思い出したくない事、いっぱい聞いて…。でも、私、おじいちゃんから聞いた話、絶対、むだにはせんけえね。」

と言った。すると祖父は、  
「どういたしまして…。」  
と小さな声で言った。

私は、被爆者三世だ。祖父の見た事、経験した事を次の世代にもちゃんと伝えようと思う。全ての人が戦争を嫌いになるように。全ての人が平和な世界を望むように…。